

2009年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出 生(円)	在庫	加工		
					生	冷	開			塩干	塩蔵	缶詰
20	355	307	0.12	57.1	17.3	0.8	3.2	2,360	49.1	27.3	15.44	11.44
21	312	269.6	0.08	75.4	17.1	0.7	2.9	2,462	64.4	-	-	-
%	88	88	68	132	99	88	90	104	131	-	-	-

年	産地	東京			輸入	輸出	水揚 数量	価 格	消費支出 生(円)
		生	冷	開					
20	65	326	231	372	238	81	343.2	67	1,483
21	65	326	215	379	211	66	308.3	69	1,478
%	100	100	93	102	89	81	90	103	100

漁業・漁獲の動向と資源

太平洋近海から沖合にかけては日本、ロシア、台湾、韓国が棒受網により漁獲している。台湾とロシアでは、近年、漁獲量が増大している。日本のシェアは、2006～2008年の平均で58.7%であった。日本の漁獲量は1950年代から多くなり、1960年代後半から1970年代にかけて低水準で、1980～1990年にかけて回復し、1991～1997年は高水準であった。1998、1999年は低水準となったが、その後回復し、近年は高水準となっている。

2009年漁期前調査によれば、西経165度～日本の沿岸に分布しているサンマの資源量は、3,513千トンで、豊漁であった2008年と比較して減少した（前年比72.7%）。2009年級の加入尾数は、約966億尾で2005年以降では上から2番目であった。CPUEは、1980～1990年にかけて上昇し、1991～1997年は高水準であった。1998、1999年は低水準となったがその後回復し、近年は歴史的にみて高水準となっていることから、資源水準は高位、資源量は2005～2009年にかけて400万トン前後で安定していることから、資源動向は横ばいと考えられている。

2年の漁獲量は前年を4万トン下回り31.2万トンであった。

本年も操業に当たって、各種休漁措置は前年同様実施され、積荷制限も含め漁獲の平準化のための措置が講じられた。

本年も前年同様早く7月8日から流し刺網、同16日には5トン未満船の棒受網、23日及び26日（ロシア水域に入域しない漁船が23日）には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして全国サンマ漁業協会所属の棒受網の20トン未満小型船が8月5日、同20トン以上100トン未満中型船が8月9日、同100トン以上大型船が8月18日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は昨年をやや上回る漁であった。8月に入ってから漁は順調に推移し、好漁になり早々と積荷制限や休漁措置が講じられたが、水揚げは昨年をやや上回った。しかし盛漁期の9月に入ってから基本的には好漁基調であったが水揚げは前年を下回るようになり、それ以降の10、11、12月と昨年をやや下回る水揚げにとどまり12月下旬を持って終漁となった。その結果総水揚げ量も昨年をやや下回った。

本年の初期漁場は流し網が昨年同様道東近海で始まり、8月に入って大型船出漁前の漁場も20トン未満船が釧路南東沖合で始まり、一部の漁船はロシア海域に入漁するとともに大型船が出漁して以降は、道東沿岸～色丹島南東沖と東西に漁場が広がった。

9月に入ってから8月の漁場とともに下旬には襟裳岬南東海域にも拡がった。10月に入ってから、上旬に三陸北部、そして中旬には三陸沖一帯に、そして中旬には常磐海域にも南下漁場が形成された。道東沖漁場が下旬には完全に消滅した。11月に入ってから三陸南部から犬吠埼沿岸に南北に漁場が形成され、主体は常磐沖に移った。12月には、一部三陸南部に漁場ができたが、上旬をもってなくなり、中旬以降は犬吠埼沿岸の黒潮前線の北側での漁場形成であった。本年もオホーツクでの漁獲はなかった。(前年0トン)

魚体長は、本年は大型(29cm)の組成が大きく減少し、通算では大型42%(89%)、中・小型58%(11%)であった。特に本年は10月中旬以降中小型魚の割合が増加し、11月下旬以降は大半が中小型魚であった。

魚価は、初漁期の7月にほぼ昨年並みに推移したが、8月は漁の好転もありかなり下落した。9月に入ってから水揚げがやや減少したことを反映し、前年をやや上回ったが、10月以降は大型と中小型の価格差が出るようになり、水揚量の減少もあって、結果的に単価は昨年並みかやや上回って推移した。9月以降は本年も2桁台の価格で推移したが、上述のごとく大型魚の少なさの割には、輸出の好調さにも支えられて、価格は極端な下落にならなかったその結果浜値は大型組成に偏重したこともあって65円で前年(65円)並みで推移した。

在庫量

本年は8.9万トンと近年では最も多い越年在庫から始まった。こうした高い在庫水準は上半期一杯続いた。昨年以上に輸出も多く、解凍サンマ等の出回りもあったが、例年在庫が最も少なくなる7、8月においても前年を大幅に上回る4万トン台であった。しかし、漁が始まり前半は順調だったが、例年在庫が多くなる中盤以降漁の停滞もあって、その結果越年在庫も6.5万トンと少なく前年(8.9万トン)を大幅に下回った。

平均在庫量は、上半期の在庫の多さを反映し、6.4万トンで前年(4.9万トン)を上回り、近年では最も多い年となった。

消費地入荷量と価格

21年の東京中央卸売市場の入荷量は、生1.7万トン、冷0.7千トンで前年(生1.7万トン、冷0.8千トン)並みであった。

本年は、産地での水揚げは減少したものの、消費地市場への鮮魚扱いには7、8、9月に多く入荷したことで大きな変化はなく、昨年並みであったのが特徴。

本年も東京消費地における入荷サイズは特大サイズ35尾が少なく40尾、45尾、50尾サイズ主体の入荷であった。

また、本年の塩干物の入荷は0.3万トンで引続き前年(0.3万トン)並みであったが、引き続き減少気味である。

本年も東京消費地価格のピークは9月にみられたが、産地でのサイズ組成が大型が少なかったということもあって、それ以降の価格の下落傾向は例年ほどなく、比較的下落幅の少ない年になった。

平均価格は生326円(前年326円)、冷215円(前年231円)、塩379円(前年372円)で、冷凍が昨年来の安値在庫も多く下げたが、生鮮は横ばい、塩干が若干の上昇となった。

また消費支出(1世帯当たり)をみると、数量がやや増加、金額が単価安を反映しやや減少し

た。

輸 出 入

本年の輸入は、85トンで前年(123トン)を下回った。

これは本年も国内生産が順調であったことが要因である。

輸出はH4年をピークに近年減少傾向が続いていたが、このところ増勢基調に転じ本年も更に多くなり7.5万トンと前年(5.7万トン)に引続きかなりの増加となった。この数字は統計が始まって以来最高の水準となった。

価格は、輸入211円(前年238円)、輸出66円(前年81円)であった。

輸出国は、本年はロシアが最も多くなり、35%を占める26,396トンで、続いて韓国、タイ、中国、ベトナム、フィリピンであった。